

高い木とからす

小川未明

青空文庫

林はやしの中に、一本ほん、とりわけ高いたかすぎの木きがありました。秋あきが近づくと、いろいろの渡りわた鳥どりが飛んできて、その木きのいただきへとまりました。群れむをなしてくるものもあれば、なかには、つれもなく、一羽わだけのものもありました。

村むらの子供こどもたちは、そのさえずる声こえを聞いて、自由じゆうに、大空おおぞらを飛んでいける鳥とりの身みの上うえをうらやんだのであります。

「あの木きに、もちぼうをつけておけば、鳥とりがとれるね。」

「とつても、飼かい方かたを知らなければ、しかたがないじゃないか。」

友ともだちが、こんな話はなしをしていると、重じゆうちゃんちんが、そばから、

「どんな鳥とりも、すり餌えをやれば、いつくんだよ。」といいました。

しかし、その木きのいただきまで上のぼれるものは、重じゆうちゃんちんくらいのもので、ほかの子こには、目めがまわるほど、あまりに高たかかったです。

ある日ひ、新あたらしいしらせがはいつて、子供こどもたちの間あいだで、話はなしに花はながさきました。それというのは、からすが、あの高たかいすぎの木きに巣すをつくつたというのでした。

「それは、ほんとうかい。どうして、こんな人ひとのたくさんところへ巣すをつくつたらうね

「
そういつた子供は、からすは、毎朝早く、まだ暗いうちから、山を出て、遠い里へいき、また晩方になると、いく組も列をなして、頭の上を鳴きながら、山へ帰るのを見たからです。」

「いつか、鳥屋のおじいさんが、からすの子供を上手に飼うとおもしろいといったよ。」
と、一人がいました。

「どうしてかい？」と、ほかの一人がたずねました。

「よくなれると、人のいうことをきくし、いろいろな口まねをするって。」

「そうかい。そんなら、僕、巣をとって、からすの子を飼おうかな。」といったのは、重ちゃんでした。

「重ちゃん、およろよ。からすは親孝行の鳥だと、うちのおばあさんがいったよ。子供の時分、やしなってもらったご恩を忘れないで、大きくなると、年とった親を食べさせてあげるって。」と、一人の子がいました。

すると、別の子が、

「学校の先生は、からすは害鳥だ。まいた豆や麦をほじくりだして食べるから、

畑へきたら、追っぱらえといったよ。」といいました。

重ちゃんは、どちらが正しいだろうかと、だまって、聞いていました。

しかし、重ちゃんは家へ帰ると、物置から、あいている鶏かごを取り出して、きれいにそうじしました。それから、ひとりで林の方へといきました。

林へきてみると、高いすぎの木が、ほかの木立を見おろして、こんもりとした姿で、そびえていました。青い空と、白い雲が、足ばやに走っていました。このとき、どこからかもどつたからすが、木の下に人の立っているのを見つけると、警戒するように、カア、カアと、仲間を呼びました。

重ちゃんは、自分も、友だちの助けなしに、ひとり木に上って、巣をとれないとさつたので、この日は、そのまま帰ることにしました。

ところが、あくる日は、ひどい風でありました。おじいさんは庭へ出て、たなにのつている鉢をかたづけられていられました。

「おじいさん、台風だろうかね。」と、重ちゃんは聞きました。

「とうとうやってきたな。この風は、いまにもっとひどくなるだろう。」と、おじいさんはおっしゃいました。

そのうち、雨と風がもつれあつて、ますますひどくなり、はたして、家も木立も、地上にあるいっさいのものが、もみくちやにされそうに見えました。

「重ちゃんは、またおじいさんのそばへいつて、

「この風では、鳥の巣なんか、飛んでしまふだろうね。」と、聞きました。

「どこかに、巣があるのか？」と、おじいさんはいわれました。

「あの高いすぎの木に、からすが巣をつくつたんだよ。しかし、木が大波にもまれるよ
うだろう。」

「だが、からすはりこうな鳥だから、日ごろ、こんなときの用心をしているかもしれない。」と、おじいさんはおつしやいました。

これを聞くと、重ちゃんは、急にからすがいとしくなりました。小さな鳥の身ながら、よく大きな自然の力にうちかとうとする精神をもつものだ、と考えたからです。それなのに、自分がその巣をとつていいものだろうか。雨風の音に、耳をすましながら、

「どうか、からすの巣がぶじでありますように……。。」と、重ちゃんは神に祈りました。

台風は、晩方までに去つたとみえて、夜は、星が、きらきらとかがやきました。そして、めつきり涼しくなりました。

あくる日、林へいってみると、ほかの木立は、枝が折れたり、葉がちぎれたりしていたけれど、すぎの木は、もとのままの姿で、高くそびえていました。からすの巣もぶじで、親からは早くから、子供たちのために餌さがしに出かけ、やがて帰ると、待ちわびていた子ですが、巣の中で、しきりに鳴くのが聞こえました。

重ちゃん、自分も、りっぱな人間となるために、ふだん、その心がけを怠ってならぬと、感じました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「いくみん三年生」

1946（昭和21）年9月

※表題は底本では、「高《たか》い木《き》とからす」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

高い木とからす

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>